【第三種郵便物認可】 日本経済新聞（夕刊） 2015年（平成27年）4月22日（水曜日）

## プロムナード

### 文学新人賞の話

今野　敏

またこの時期がやってきた。桜が散り、ツツジが咲くと、文学新人賞の候補作がどかっと送られてくる。

二つの賞の時期がダブっているので、合計で、九本から十本の候補作を読まなければならない。

二つの賞というのは、角川春樹小説賞と、江戸川乱歩賞だ。角川春樹小説賞は、ジャンルの規定はないが、エンターテインメント小説であることが条件だ。江戸川乱歩賞は、ミステリーの新人賞だ。

新人賞と言っているが、実はプロアマ問わずなので、厳密には新人賞とは言えないかもしれない。だが、応募者のほとんどが、アマチュアであり、歴代受賞者にもプロは極めて少ないので、新人賞と言ってもかまわないだろう。

毎年、ゴールデンウィークは、この候補作を読むことに費やす。まあ、この時期は、どこに出かけても混み合っているし、飛行機も鉄道もなかなか予約が取れず、道路は大渋滞というありさまだから、じっと家に閉じこもっているのも正解かもしれない。

応募総数は、二百作前後だろうか。正確な数字を私は知らないが、とにかく膨大な数の応募作の中から最終選考に選ばれた作品だ。

そして、この中から受賞作が選ばれる。いい加減に読み飛ばすことはできない。

この連載の四回目に、文学賞選考会のことを書いたが、各選考委員は、

委員の意見が食い違ったことがない。選考委員は、角川春樹社長、北方謙三氏、そして私の三人だ。選考委員の人数が少ないので、意見が割れずに済んでいるのかもしれない。

江戸川乱歩賞の選考委員は五人で、任期は四年だ。それぞれの任期が少しずつずれているので、一気に顔ぶれが入れ替わることはない。

この賞は、日本推理作家協会が主催しているので、選考委員に必ず代表理事が入らなければならない。現在の代表理事は私なので、選考委員に参加しているわけだ。

それにしても、世の中には作家になりたい人がたくさんいるのだなあ、と感心する。私の場合、ほとんど初めてまともに書いた小説で新人賞を取り、作家になっていた。

運がよかったとも言えるが、作家になるより、作家でいつづけることのほうがたいへんだというのが実感だ。デビューするための競争は厳しいが、作家になってからの競争は、それよりはるかに厳しい。

作家になったとたんに生き残りをかけた闘いが始まるのだ。これも、連載五回目に書いたことだが、作家イコール人気作家ではない。

新人賞は受賞で終わりではない。そこから作家生活が始まるのだ。新人賞の応募者は、そのことをよく理解していただきたいと思う。

生き残るためには、高水準の物語を、次々と発表しつづけなければならない。それがプロだ。さて、今年は本当のプロになり得る候補の作品が見つかるだろうか。楽しみだ。

（作家）

## トラベルナビ

らいふプラス

# 白無垢の霊峰恵む幸

## 石川・白山

### イヌワシの雄姿 遭遇も

北陸新幹線の開通で石川県はぐっと身近になったが、金沢だけで帰るのはもったいない。少し足を延ばして県下第2の都市、白山市を訪ねれば、日本三名山の1つ、霊峰白山が優美な姿で迎えてくれる。山の恵みである豊かな水のもたらす食文化を堪能すれば、石川県の違った魅力が見えてくるはずだ。

□　□

白山は富士山、立山と並び日本三名山に数えられ、国立公園に指定されている。石川だけでなく富山、福井、岐阜の4県にまたがり、2000㍍級の山々が連なる。万年雪を抱く風景が美しく、高山植物の宝庫だが、実は、江戸時代まで活動していた活火山でもある。周囲に温泉が多いのはそのためだ。

白山は古くから信仰の対象になってきた。白山比咩（ひめ）神社は、全国に3000余りある白山神社の総本宮で、ご神体は霊峰白山そのものだ。現地では「しらやまさん」と親しまれ、年間70万人の参拝客を集める。真っ白な雪を抱いた白山の風景が白無垢（むく）を連想させるためか、縁結びの神としても知られる。表参道は杉木立に覆われ、こけむした250㍍続く石段を上っていくと、「霊験あらたか」という言葉が脳裏をよぎる。

毎年この時期、白山周辺は雪解け水が伏流水となり、春の大地を潤す。手取川の水かさが増し、岸辺ではフキ、ワラビ、セリ、コゴメなどの山菜が芽吹く。雪で覆われていた山菜は、なぜか甘みが増すという。白山市を訪れた4月半ば、金沢・兼六園の桜は満開だったが、ここはまだ雪が残り、梅がようやく開いたところだった。

白峰地区は、江戸―明治期の家屋や土蔵などが軒を連ねる

そんな白山市の最大の魅力は、山麓の豊かな水がもたらす様々な食の文化だ。石川県は米どころでもあり、菊姫、天狗舞（てんぐまい）などの清酒は全国区の銘柄だ。イワナ、アユなどの川魚のほか、キノコ、そばなど逸品が多い。最近の注目はイノシシなど地元の野生動物の肉だ。市内に解体場ができたことで、供給体制が整った。地元ではこれら山の幸を「白山百膳」として全国に発信している。

自然と、その恵みである食に魅せられ、金沢市から移り住んだのが、白山観光協会や白山商工会の中核メンバー、高木啓介さん（40）だ。金沢で料理人として働いていたが、7年前、白山市の限界集落、仏師ヶ野地区に一家で移った。それまで3世帯、5人しか住んでいなかったところに新たな5人が加わった。高木さんは廃屋だった古民家を改修し、旅館「ふらり」を開業した。1日3組限定、囲炉裏の炭火で焼いたイワナやイノシシ鍋が人気だ。

白山市の観光名所として外せないのが、江戸から明治期の街並みが残る白峰地区だろう。重要伝統的建造物群保存地区に指定され、昔の庄屋家屋、土蔵などが軒を連ねる。建物の特徴は黄土色の壁と2階部分の縦長窓だ。かつて養蚕が盛んで、縦長窓は養蚕のための通気性を考慮した名残だ。日帰り入浴施設や古民家のカフェもあり、一年中、観光客を集めている。

□　□

この時期、白山の自然を満喫するなら、ブナオ山観察舎がおすすめだ。ニホンザル、ニホンカモシカなど野生動物が観察できるほか、運が良ければイヌワシの雄姿を見ることもできる。夏には高山植物が山肌を埋め尽くし、登山客を楽しませる。

白山観光協会の関係者は「金沢で観光した後、お泊まりはぜひ白山で」と訴える。確かに金沢から1時間ほどで大自然に囲まれた、石川県のまったく別の顔を垣間見ることができる。古民家宿の囲炉裏で、ゆっくり燃えていくオレンジ色の炭火を眺めていると、急がなくてもいいんだなと心が静かになっていった。

（編集委員　鈴木亮）

白山比咩神社は、全国に3千余りある白山神社の総本宮

### ☆―旅支度 合掌造りの郷近く

東京から金沢まで北陸新幹線なら2時間半足らず。空路なら1時間の小松空港が起点となる。在来線とバスを乗り継ぎ、白山までは1時間ほどだ。周辺には温泉も多く、一向一揆歴史館、白山ろく民俗資料館などがシニア客に人気だ。手取川ジオパーク、そば打ち体験など、子どもが楽しめる施設も多い。

4県にまたがる白山からは富山、岐阜の合掌造りの郷（さと）も近い。世界遺産である、富山県南西部の五箇山から岐阜県北西部の白川郷まで、車なら一日で回れる。